

機関番号：32204
 研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20330193
 研究課題名（和文） 発達障害児のリジリエンシー（心の回復力）の形成要因に関する研究
 研究課題名（英文） An investigation on contributing factors to the resiliency of children with developmental disorders
 研究代表者
 仁平 義明（NIHEI YOSHIAKI）
 教育学部・教授
 研究者番号：10007833

研究成果の概要（和文）：

発達障害児のリジリエンシー（心の回復力）の形成に寄与する要因がどのようなものであるかについて研究を行った。研究は、幼児期から青年期までの発達障害児・親・教師などを対象にした面接、観察、質問紙調査による多面的な研究であった。そこで明らかになったのは、発達障害児のリジリエンシー形成には初期の多くの環境要因や親自身のリジリエンシーが重要であることだけでなく、青年期以降の時期では発達障害者自身によるリジリエンシーの自己形成が重要な意味を持つことであった。

研究成果の概要（英文）： We investigated contributing factors to the development of resiliency of children with developmental disorders. Our multiphasic investigation comprised of studies by interview, observation, and questionnaires survey with children with developmental disorders from infancy to adolescence, their parents and teachers. The results indicated not only the importance of early environmental factors and the resilient characteristics of parents, but also the importance of self-development of resiliency by adolescents with developmental disorders in later years.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	3,100,000	930,000	4,030,000
2009年度	2,700,000	810,000	3,510,000
2010年度	1,700,000	510,000	2,210,000
年度			
年度			
総計	7,500,000	2,250,000	9,750,000

研究分野：発達障害学

科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育

キーワード：発達障害、リジリエンシー、リジリエンス、ストレス、二次障害、家族、大学生

1. 研究開始当初の背景

リジリエンシーは、たとえば虐待など、発達上問題が起こってもなんら不思議ではないような強い持続的なストレスがあっても、それでもなお、子どもたちが柔軟に比較的健康な精神発達をする過程（リジリエンス）の背後にあると考えられる内的な「心の回復

力」を意味する概念である。

発達障害のある子どもたちも、発達の過程では環境側の要求が障害のもつ特徴と適合しないことが多く、新しい環境への適応や、変化をつねに要求する教育という事態が不可避免的に強い持続的なストレスを生じ、さまざまなかたちの二次障害を生む。しかし、い

ったんストレスのマイナスの影響がみられたとしても、二次障害を持続的に起こすことなく比較的精神的に健康な発達を示すケースもある。われわれは、発達障害児についてもレジリエンシーという考え方が適用できると考え、その形成要因を明らかにする必要があると考えた。

しかし、障害は健康という概念と両立しないと考えられたためか、発達障害児自身についてのレジリエンシー研究は、国内外ともにみられなかった。

2. 研究の目的

発達障害児にレジリエンスをもたらすものは、環境側の保護的・支援的な要因のほかに、それらの積み重ねによって形成された心の回復力（レジリエンシー）といえる本人の内的な特性も関与すると考えられる。そこで、発達障害児で、二次障害をほとんど示さないで比較的精神的に健康に成長したケースを分析し、従来レジリエンシーのある者の特徴としてあげられてきた特徴をそれらの障害児がどの程度持てるようになるのか、レジリエンシーを形成させた要因はどのようなものであったかを明らかにすることが、本研究の最終的な目的であった。

3. 研究の方法

本研究は、全体としては、発達障害児でレジリエンシーを持った子どもたちがどのくらいの割合でありうるのか、そうしたレジリエンシーを持つことができた発達障害児の特徴（個人的特性・親や教師の対応の特徴・環境要因の特徴）がどのようなものであったか、発達障害児のレジリエンシー形成のためにどのような方策が可能かを検討する試みである。

レジリエンシーの形成過程をみていくためには、発達初期から大学生程度までの広い年齢範囲の変化を対象にする必要がある。そこで、次のような多面的な対象と方法による研究を行った。

(1) <出生から青年期までの形成要因：面接調査>

病院の発達障害ケースから、すでに青年期に入った10歳以上の子どもと家族について、出生時からの多くの要因を明らかにする半構造化面接による調査を行った。発達の過程で二次障害をほとんど示さないで比較的安定した経過をたどったケースと、そうではなかったケースの要因比較研究である。対象ケースは、PDD12家族、ADHD12家族。

(2) <小学校での担任の対応：観察研究>
小学校での教師の対応が、発達障害児にいかにして不必要なストレスを与えない適切な対応になるか、より積極的な意味を持つ対応

になるかを研究した。そのため、通常学級に在籍する発達障害児と同級生の児童たちに、“うまい対応”をしている担任教師の授業について、観察による分析とビデオ分析を行った。

(3) <母親自身のレジリエンシー：面接調査>

障害児のレジリエンシーには、親自身のレジリエンシーもプラスに働くと考えられる。子どもにストレスを与えない養育態度を持ち続けた一人の母親のケースを、あらためて面接を行うことで、子どもの発達初期から就労までの長期間にわたる母親の対応と彼女のレジリエンシー特性の分析を行った。

(4) <発達障害大学生に対する学修支援に関する考え方の立場による差：質問紙調査>

アスペルガー障害の学生に対して、集団セミナーの免除など、どのような学修支援までが許容されるかに関して、大学の教職員、相談にあたるカウンセラー、学生間の考え方がどれだけ一致しているか調査を行った。

(5) <発達障害大学生のレジリエンシーの自己形成：面接調査>

発達障害、とくにアスペルガー障害の大学生が、大学内で適応していくためのストラテジーを、経験を通じて身につけるかたちでレジリエンシーを形成していったケースについて面接による検討を行った。

4. 研究成果

発達初期から大学生まで、広いスパンの発達を扱った研究から、次のようなことが全体として明らかにされた：発達障害児のレジリエンシーの形成は、早い時期には相対的に障害特性に適合した親や環境側の対応という要因が大きく働くが、大学生レベルの成人期に近づくにしたがって、環境からの支援から学習してきた自己の特性を考慮したストラテジーを身につけていくかたちをとる。

さらに、発達障害児本人のレジリエンシーだけでなく、親など環境側のレジリエンシーも発達障害児の健康な発達にとって重要であることも示唆された。

個別的な研究の結果は以下の通りである。

(1) <出生から青年期までのレジリエンシー形成要因：面接調査>

この研究からは、初期に早く診断がされていること、親の前向きな障害受容、診断後の家族の積極的な育児姿勢、学校や周囲への障害の実態のオープンさ、無理のない価値観と将来観、周囲の理解者と協力者、などがレジリエンスを促進する要因であることが示された。

(2) <小学校での担任の対応：観察研究>

この研究からは、学級内での教師の「さり

げない支援」が他の児童の間接支援を誘発する要因であること、当該の障害児童だけでなく他の児童に対しても共通する働きかけ（包括的支援）をすることが、結果的に当該児童にも効果的な支援になることが明らかにされた。

(3) <母親自身のレジリエンシー：面接調査>

発達障害児に過剰なストレスを与えない適切な対応を生育初期から就労までの長い間とりつづけることができた一人の母親のケース分析を行った。結果からは、その母親は高いレジリエンシーを有しており、その特徴は、従来レジリエンシーを持つ者の特性とされてきた特徴とほとんど共通のものであることが明らかになった。

(4) <発達障害大学生に対する学修支援に関する考え方の立場による差：質問紙調査>

発達障害の大学生が大学の中で適応し、レジリエンスを達成するために、教員、職員、カウンセラー、周囲の学生たちが、彼らへの支援についてどの程度までが許容されると考えているかについて大規模な調査を行った。その結果、発達障害学生の学業支援で何が許容されるべきかについて、最大の権限を持っている教員とカウンセラーとの間に大きな乖離があることが明らかになった。ここからは、発達障害児たちが、大学レベルまでは到達できても、その後のレジリエンスを達成するには、大学という教育機関のすべての構成員の一致した理解と柔軟な対応が必要になることが示唆された。

(5) <発達障害大学生のレジリエンシーの自己形成：面接調査>

レジリエンスを示した発達障害の学生は、他の学生からのサポートを引き出すだけでなく、自分も他者のサポートを行うという双方向的なサポートのストラテジーを、自分の可能なやり方によってとれるようになっていくことが明らかになった。これには、大学生になるまでの、また大学内でのサポートを受けた経験が促進的に働いていると考えられた。この段階では、レジリエンシーを、発達障害学生が自らつくりだすようになっていくともいえた。

(6) <研究全体から>

今回の研究結果から、また国内外のレジリエンシー研究を展望した結果、レジリエンシーの形成が達成される割合は、必ずしも高くないと考えられる。しかしそれでもなお、世界的にレジリエンシー研究が最重要な研究と実践のテーマになっており、社会が心の回復力という考え方を支持し、そのための支援

に向かっていることは、社会そのものがレジリエンシーを持っていることを示唆していると考えられる。

なお、これらの研究成果については、国内外への論文などによる公表を行ってきたほか、発達障害児の教育関係者、保育士、保護者、医療者などを対象とした公開シンポジウムを下記のようなかたちで2度にわたり開催、公表することで社会的周知をはかった。

①2009年2月7日「公開シンポジウム in FUKUSHIMA 2009 発達障害のある子どもの心の回復力（レジリエンシー）を考える」（開催場所：福島県福島市・コラッセふくしま）

②2011年2月13日「公開シンポジウム in OYAMA 2011 発達障害のある子どもの心の回復力（レジリエンシー）を考える」（開催場所：栃木県小山市・白鷗大学東キャンパス）

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計18件）

○山本佳子・富田香 2011 福島大学における自閉症スペクトラム障害を持つ学生の学生相談の現状と課題。精神療法, 183, 199-203. <査読なし>

○星野仁彦 2011 コンサータと ADHD. 精神科, 18(2), 138-144. <査読なし>

○山本佳子・仁平義明 2010 アスペルガー障害学生の学業支援。学生相談研究, 31(1), 1-12. <査読あり>

○山本佳子・仁平義明 2010 アスペルガー障害学生への学業支援許容度の立場による相違。東北児童青年精神医学会誌, 12, 52-60. <査読なし>

○星野仁彦 2010 成人の ADHD の治療精神科治療学. 25(7), 903-910 <査読なし>

○山本佳子・仁平義明 2009 統合失調症の大学生に対する卒業をゴールとしない支援。学生相談研究, 30(1), 12-22. <査読あり>

○Tsurumaki, M., Sato, T., & Nihei, Y. 2009 The effect of negatively worded measures of self-esteem on children. *Social Behavior and Personality: An International Journal*, 37 (10), 1383-1384. <査読あり>

○Yamamoto, Y., Nihei, Y. 2009 Difficulties in adjusting to college life experienced by students with pervasive developmental disorders: comparison with schizophrenic students. *Tohoku Psychological Folia*, 67, 1-5. <査読あり>

○仁平義明 2009 人間力育成のパラダイム・シフト—ハーディネス（心の頑強さ）からレジリエンシー（心の回復力）へ—。現代のエスプリ, 500, 194-205. <査

読なし>

- 鶴巻正子・朴 香花・原野明子・佐藤 拓
2009 福島県内の幼稚園における保育者が考える特別支援教育の課題. 『福島大学総合教育研究センター紀要』, 7. 95-100.
<査読あり>
- 鶴巻正子・岩谷美奈・佐藤 拓・原野明子
2009 小学校入学前の発達障害幼児に指導が必要なソーシャルスキル-小学校・中学校・特別支援学校の教員を対象としたアンケート調査から-. 『福島大学総合教育研究センター紀要』, 7. 111-118. <査読あり>
- 仁平義明 2009 病気をはねかえす心の強さ「ハーディネス」から心の回復力「レジリエンシー」へ. 仙台医師会報, 542, 3-7.
<査読なし>
- 星野仁彦 2008 注意欠陥および破壊的行動障害. 精神科治療学, 23, 216-217.
<査読なし>
- 佐藤 拓・仁平 義明 2008 青年期のキャリア・レジリエンス-進路決定のリスク要因・促進要因-. 東北大学学生相談所年報, 第3号, 23-27. <査読なし>

[学会発表] (計 36 件)

- 星野仁彦 プライマリ・ケアの現場における発達障害 発達障害に気づかない大人たちへのプライマリ・ケア(初期対応) 日本心療内科学会 2010年11月20日(岡山コンベンションセンター)
- 星野仁彦 成人になって合併症を示して来院した注意欠陥・多動性障害(ADHD)者への治療的アプローチの試み(第5報)アスペルガー症候群との比較検討 第51回日本児童青年精神医学会 2010年10月28日(ベシア文化ホール 前橋商工会議所会館)
- 鶴巻正子・仁平義明 漢字の書字学習に対する教師の要求水準. 日本特殊教育学会第48回大会, 2010年9月18日(長崎大学)
- 仁平義明 リズィリエンス革命の20年-心の回復力研究の意義-. 東北心理学会第64回大会記念講演, 2010年9月11日(宮城学院女子大学)
- 鶴巻正子・仁平義明 ADHDの子どもにおける漢字の書字の特徴, 東北心理学会第64回大会, 2010年9月12日.(宮城学院女子大学)
- 星野仁彦 小児・思春期の心身症的訴えの背景にみられる軽度発達障害の検討 第51回心身医学会 2010年6月26日(仙台国際

センター)

- 仁平義明 心の回復力”(レジリエンシー)とユーモア. 日本笑い学会第16会総会(特別講演), 2009年7月12日, 東北大学.
- 佐藤 拓・山本佳子・富田 香 回復力共有体験によるメンタルヘルスへの影響 第27回日本学生相談学会, 2009年5月24日, 津田塾大学(東京).
- 村田朱音(研究協力者)・鶴巻正子 発達障害の子どもを支える教師・学校. 「公開シンポジウム in Fukushima 発達障害のある子どもの心の回復力(レジリエンシー)を考える」2009年2月7日(こらっせふくしま)
- 相川恵子(研究協力者) 発達障害を持つ親の心の回復力. 「公開シンポジウム in Fukushima 発達障害のある子どもの心の回復力(レジリエンシー)を考える」2009年2月7日(こらっせふくしま)
- 佐藤拓(研究協力者) 大学生が自分でつくる心の回復力. 「公開シンポジウム in Fukushima 発達障害のある子どもの心の回復力(レジリエンシー)を考える」2009年2月7日(こらっせふくしま)
- 楢木雄史・山本佳子・星野仁彦・仁平義明(他4名) 発達障害児のレジリエンシー要因. 平成20年度福島県臨床心理学会, 2008年12月7日(福島市)
- 鶴巻正子・仁平義明(2008). 否定的記述を含む測定が児童に及ぼす影響 日本特殊教育学会第46回大会「2008 山陰大会」, 2008年9月19日.(米子コンベンションセンター)

[図書] (計 7 件)

- 星野仁彦 発達障害を見過ごされる子ども, 認めない親. 2011 幻冬舎 203P
- 星野仁彦 発達障害に気づかない大人たち<職場編>. 2011 祥伝社 257P
- 星野仁彦 「空気が読めない」という病 2010 KK ベストセラーズ 206P
- 星野仁彦 発達障害に気づかない大人たち. 祥伝社 2010 252P
- 仁平義明 リジリエンス入門(少し長いあとがき) ハウザー他著 ナラティブから読み解くレジリエンス: 危機的状況から回復した「67分の9」の少年少女の物語. 2011 仁平説子・仁平義明訳, 北大路書房. 265-275.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

仁平義明 (NIHEI YOSHIKI)
白鷗大学・教育学部・教授
研究者番号: 10007833

(2) 研究分担者

- 鶴巻正子 (TSURUMAKI MASAKO)
福島大学・人間発達文化学類・教授
研究者番号：40272019
- 星野仁彦 (HOSHINO YOSHIHIKO)
福島学院大学・福祉学部・教授
研究者番号：10157018
- 山本佳子 (YAMAMOTO YOSHIKO)
いわき明星大学・人文学部・准教授
研究者番号：90336462

(3) 研究協力者

- 相川恵子 (AIKAWA KEIKO)
横浜市立篠原西小学校・主幹教諭
- 村田朱音 (MURATA AKANE)
福島県養護教育センター・指導主事
- 佐藤拓 (SATO TAKU)
新潟リハビリテーション大学・講師